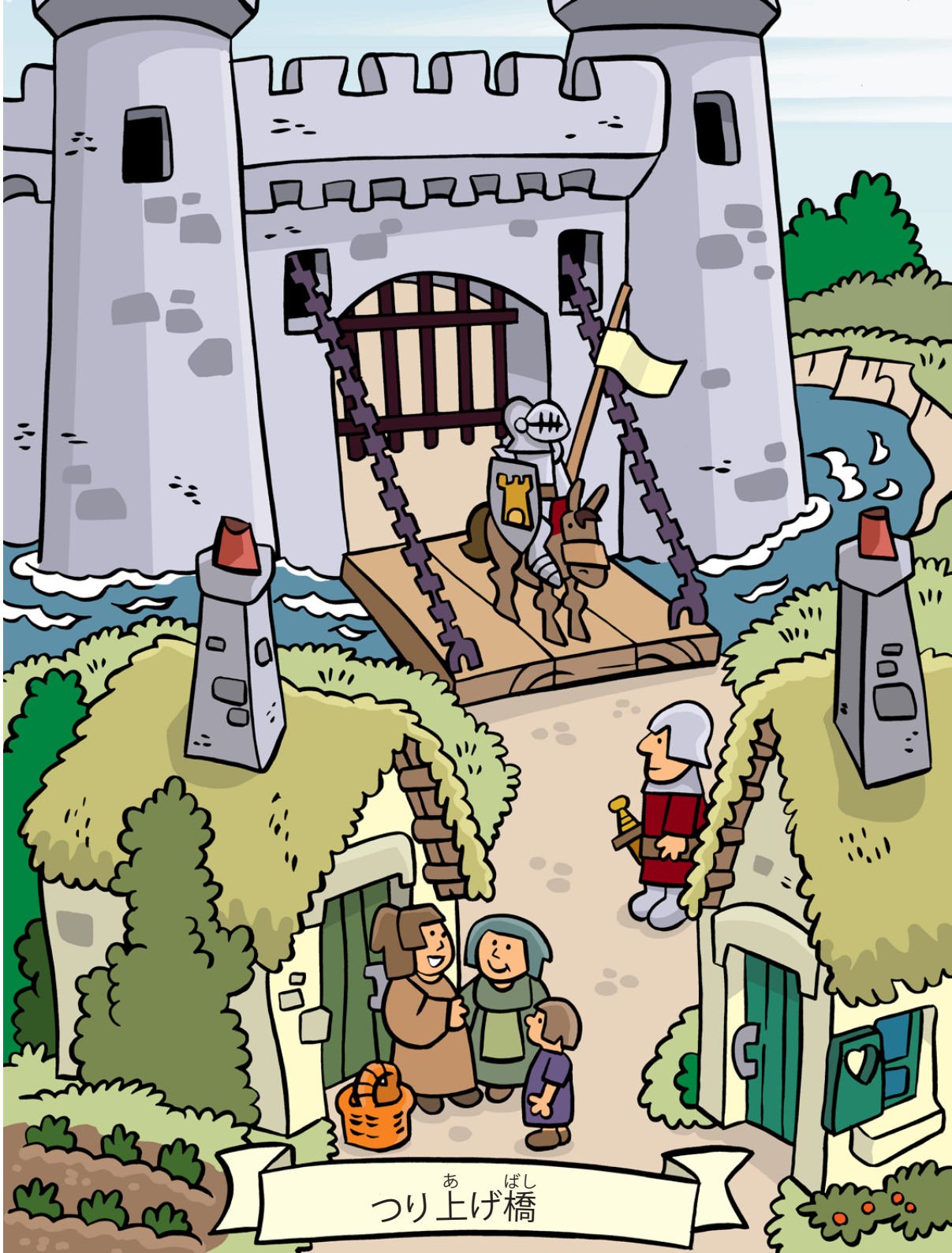
ライオネルを つなげる

くさりは、たくさんの 小さな 輪が つながって できているよね。くさりの 一つ一つの 輪は、それぞれ となりの 輪と、腕と 腕を 組み合い、たがいに しがみつき合っているんだ。強く しがみつき合っている限り、くさりが 切れることは ない。

昔、たがいに 心から 愛し合う くさり家族が いたよ。みんなが たがいに しっかりと ハグして しがみつき合っていたから、家族の くさりは とても じょうぶだったんだ。

さて、その くさりには、ライオネルという 小さな 輪が いた。ライオネルは ほかの 輪よりも 細かったけど、 両側の 輪と 一生 けんめい ハグし合って、しっかりと つながっていたよ。さて、ライオネル一家の くさりは、お城の つり上げ橋を 支えていた。



つり上げ橋は、お城の 外に ある、とても 大きな 橋だよ。人々が お城を 出入り したい 時は、つり上げ橋を 操作する 人が、ものすごく 大きくて 重い 車輪を 回し、くさりで つり上げ橋を 下ろして、お堀の 上に 渡すんだ。すると、人々は 橋の 上を 歩いて 安全に お堀を 渡ることが でき、馬に 乗った 騎士たちも、その 上を かけ足で 渡ることが できるんだ。

問題は、ある 晴れた 日に 起こった。木々の こずえでは、鳥たちが 楽しそうに さえずり、そよ風が お堀の 水に さざ波を 起こしていた。けれども、くさりの 上の 方では、今にも 問題が 起ころうと していた。

ライオネルだ。くさりの 自分の 場所に 一生 けんめい しがみついていたけれど、ブツブツと ひとり言を 言い始めた。「この ぼくを 見てよ!」と、ライオネルは つぶやいた。「ぼくは 何て つまらない 存在なんだろう。ぼくが 毎日 どんなに 一生 けんめい がんばっているかなんて、きっと だれも 気づいてさえ いないだろうなあ。」

ライオネルは、家族の みんなを 見渡した。つり上げ橋が 下ろされるたびに 使われる ことを、みんな、とても 喜んでいるようだ。でも、ライオネルは そうじゃ なかった。ライオネルは、ふきげんだったんだ。

「ぼくが やることなんて、大したこと ないに ちがいない。事実、今まで やってた ことを さぼったって、だれも 気づきさえ しないさ。」

ライオネルは 辺りを 見回した。「たくさんの 輪だなあ! 全部で いくつ あるんだろう? 1、2、3、4、 5…10…20…30…40…50 個も ある! こんなに たくさんの 輪が あるんだ。ぼく一人が ぬけたって、どうってこと ないさ。」

ガラガラ! ガラガラ!

「橋が 下りるぞー!」
大きな 声が ひびき渡った。
声の 主は、つり上げ橋の
親方だ。親方は つり上げ橋を
下げるために、一生 けんめい
車輪を 回して くさりを 出して
いた。

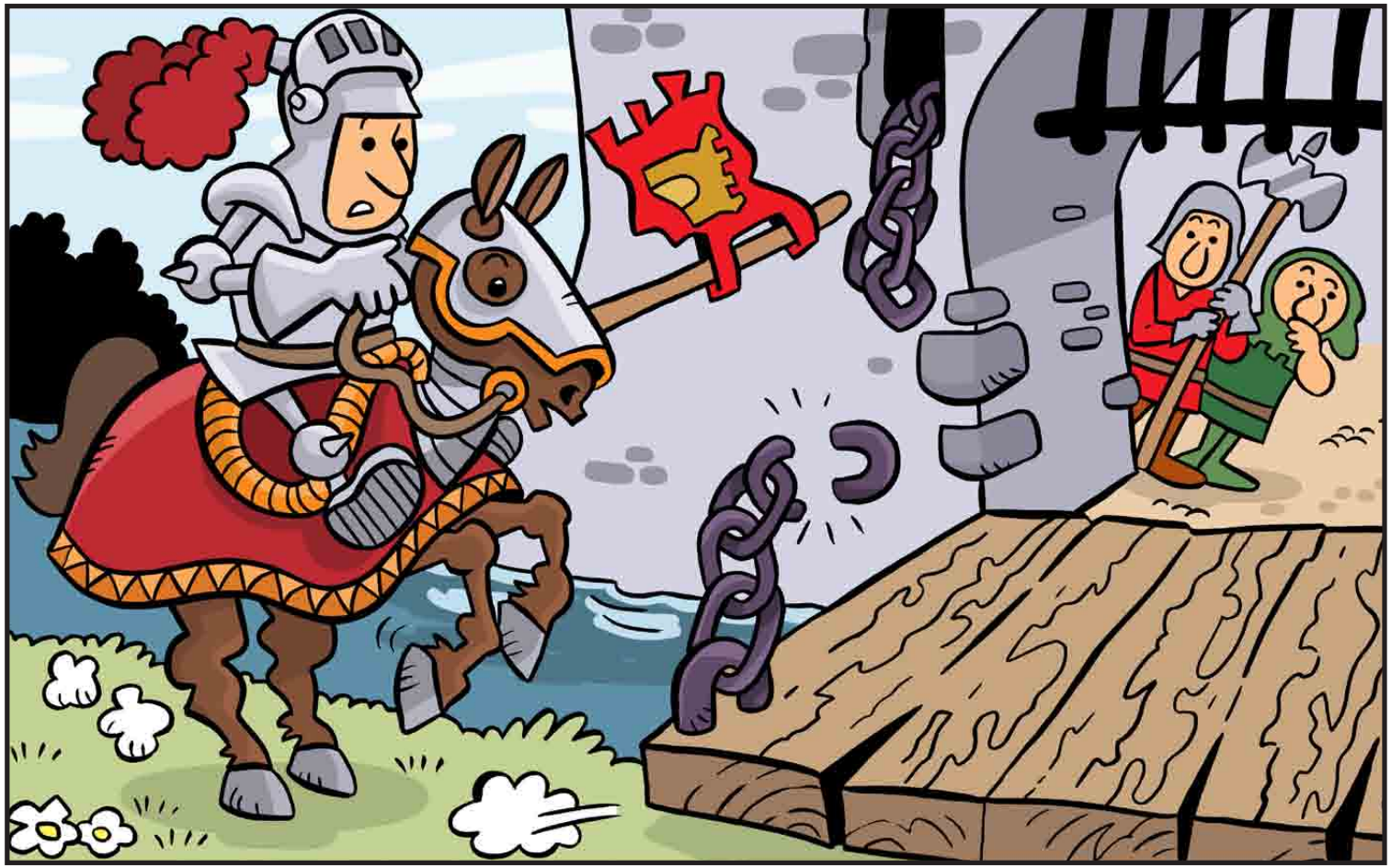
（チャンスだ!）と
ライオネルは 思った。（橋が
下りたら、ぼくは くさりから
飛び出て、橋に 降りるぞ。
仕事は、くさりに いる ほかの
みんなが できる。彼らには、
ぼくなんか いらないもの。）

そう 思いながら、
ライオネルは 待った。そこを
はなれるのは、ちょうど よい
タイミングでなくては ならない。

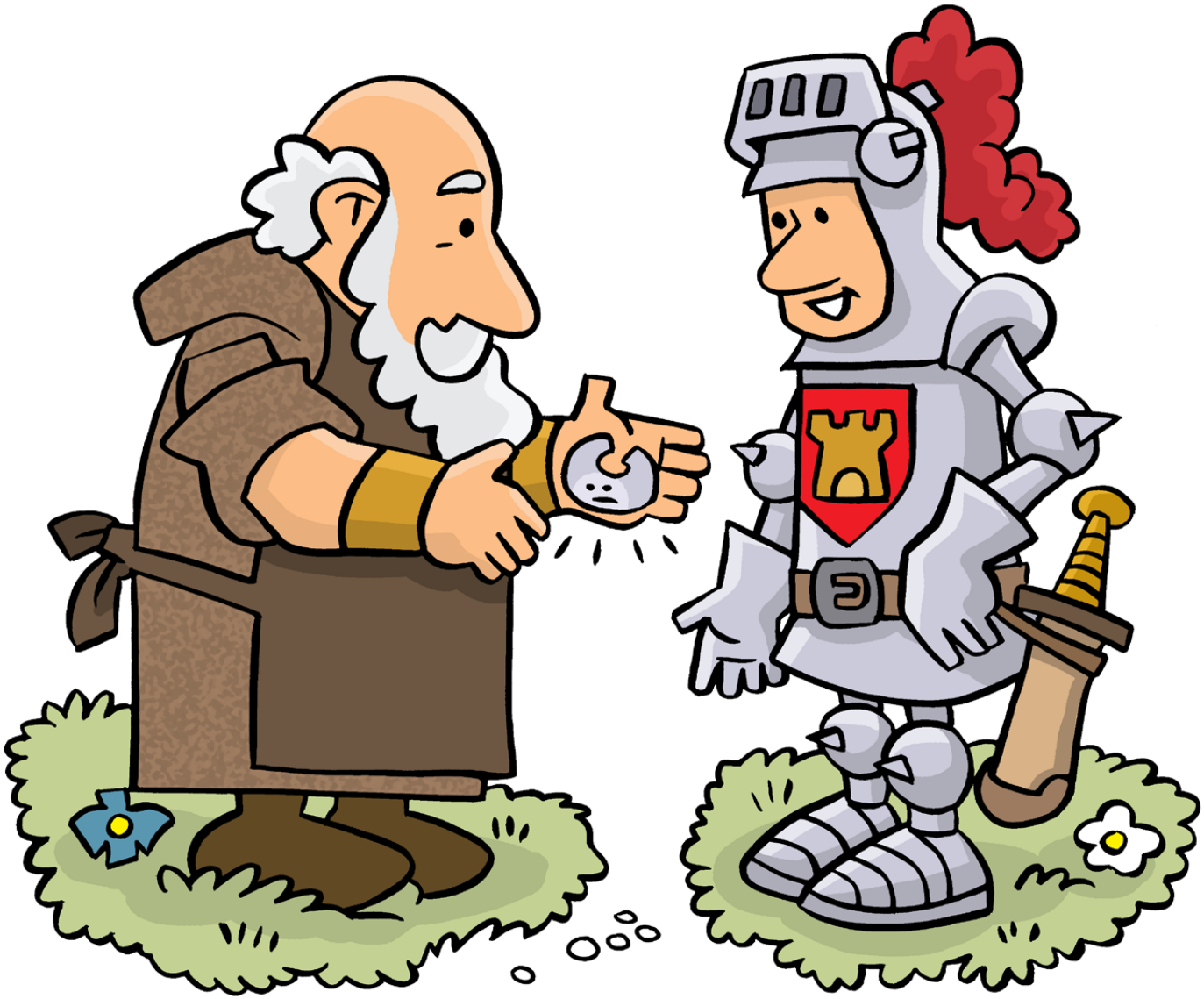
大きな つり上げ橋が、
だんだん 下がってきた。
どんどん、スピードを 上げて。

ついに ライオネルは、この時だと 思った。家族の みんなが たがいどうし しっかりと
つかまり合って くさりを じょうぶに しているなか、ライオネルは くさりの 中の 自分の
持ち場を パッと 放した。

すると、つり上げ橋が 音を たてて 下に 落ちていった。ライオネルの 家族の くさりは
宙ぶらりん。こわれてしまったんだ。



ライオネルは 落ちた 地面に 転がって、こわれた くさりと、水の 上に 宙ぶらりんに なって 危険な 状態の 橋を 見上げた。ライオネルは 心配に なってきた。（ぼくって、本当は くさりの 大切な 部分だったのかな？） ライオネルは とまどっていた。



橋を 渡ろうとして 来た 騎士は、この 光景を おどろきの まなざしで ながめていた。「何て ことだ！ 一体 何が 起こったと いうのだ！」

騎士は 思わず 声を 上げた。

馬から パッと 飛び降りると、騎士は つり上げ橋に 走り寄った。そして、くさりを くわしく 調べた。注意深く くさりの 全部の 輪を 調べているうちに、こわれている 部分が 見つかった。そして、地面に 落ちている ライオネルも 見つけた。騎士は ひざを かがめ、ライオネルを 拾い上げて 言った。

「おいおい、おまえさんだったのか。こんなに ちっぽけな 輪が、ずいぶんと 大きな 騒動を 起こして くれたものだ！ 一体 どれだけの 者たちが おまえさんを 当てに しているか、わからなかったと 見えるな。」

ライオネルには、騎士の 言葉が 本当の ことだと わかっていた。そして、すまないと 思ったんだ。「もし 再び 直してもらえる ものなら、自分の 務めを 喜んで 果たそう。」 ライオネルは、そう 自分に 言い聞かせた。

職人が、道具の いっぱい 入った 大きな 袋を 持って、やって来た。そして、早速 こわれた くさりを 直しに かかったよ。あちこち いじくり回し、道具を せっせと 使い、バンバンと たたいて、やがて ライオネルを もといた 場所に もどした。くさりが、元通りに なったんだ。

「橋が 下りるぞー!」 つり上げ橋の 親方が 大声で さけんだ。今、ライオネルは 自分の 務めが ちゃんと わかっている。一生 けんめい しがみついている。もう 決して、腕を 放したりは しない。

作者不明　絵：ディディエ・マーティン　デザイン：クリスティア・コープランド
出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2011 年、ファミリーインターナショナル
“Linking Lionel” --Japanese　http://www.mywonderstudio.com/0-5/2011/6/27/linking-lionel.html